

明治時代、釧路で使われていた方言「モコ」について

山本 悦也

丘の町から下町へ下る急坂を、終日倦みもせずに、下っては上り、上っては下り、先を争ふて競争する彼らのスケーチングは一瞬千里を行くの烈い運動である。汗をしとどに流して――凍ゆる手を口に当てながら勇ましい北国の児等が唄ふを聞け――

去れよ、(道を除け) 去れよ。

去らねば坂からモコ来るぞー。

「モコ」とは何を意味するのか？、訊ねても彼等は知らぬ。古老も知らぬ。斯く唄って成長した私にも解らないのである。然し彼等は別に之れを不思議ともせずに友から友へ、兄から弟へと唄伝へて、来る冬毎に唄ふのだ。

野中賢三「南国へ」より

野中賢三は、明治 43 年、中央の雑誌『文章世界』にこの作品を投稿し、田山花袋に優等として認められた。賢三は、明治 27 年、5 歳の時に佐賀県から家族とともに釧路に移住し育った。この作品は、故郷、佐賀の友人にあてた書簡文の様式を取っている。しかし、大正 5 年、肺患が悪化し享年 28 歳の若さでこの世を去った。ほぼ石川啄木と同時代に活躍した。

私は釧路生まれの釧路育ちで、今 69 歳であるが、この「モコ」という言葉を聞いたことがない。『北海道方言辞典』(石垣福雄著)には「おぼけ。恐ろしいもの。」とあり、モッコ、モーコとも言うとしている。関連方言として青森・福島・秋田が挙げられおり、東北方言がもとになっていると思われる。

幕末に書かれた『松前方言考』(淡斎如水著)に「モコ」が載っていた。それによると「小児をおどす時のことば。」とあり、考えてみた。

この「モコ」は、「物の怪」から来ているのではないか。

mononoke→monoke→monoko→moko と変化したと思われる。物の怪は人にとりついて、病気や不幸をもたらすもの、悪霊だ。平安時代の『源氏物語』にも出てくる。明治の末には、すでに言葉の意味が分からず、わらべうたとして唄われ伝えられてきた。

さらにこのわらべうたのメロディが七夕の「ろうそく出せよ」の唄にとっても似ていることに気が付いた。

去れよ、(道を除け) 去れよ。

去らねば坂からモコ来るぞー。

(ローソク出一せー 出一せよー)

(出一さーないとー かっちゃんぞー)

釧路の町は、坂が多い。当時は、スキー、スケートは乗り放題であった。賢三少年もわらべうたを唄って、自由自在に滑って、遊んでいたであろう。